

新刊  
紹介

廣川勝美著

『犯しと異人―むかし話の基層―』

(人文書院・発行一九八六年五月)  
(B5判・二四四頁 一、五〇〇円)

本書は、最近民俗学や文化人類学の分野で論議をよんでいる〈異人〉論についての、言語伝承の分析からの新しい提言であり、昔話や神話の彼方に「現代人を再生させる始源の混沌への通路」を求め、民族の「アイデンティティの根源」を探ろうとする、今日的課題に貫かれた著作である。

その結論をあえて要約するならば、異人とはマクロコスモスとミクロコスモスの結合にかかわる存在であり、二つのコスモスの結合の回路は禁忌への〈犯し〉というわざによってこそ開かれる、ということであ

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth  
Not to be thought expert in both.

る。この結論は衝撃的である。我々は、昔話や神話がしばしば禁忌を語り、また禁忌の違反を語ることにについてはよく知っている。しかし本書によれば、他ならぬ禁忌の犯しこそが伝承されるものの本質的、根源的枠組であり、不可欠なものなのだということが、謎解きにも似た面白さで分析されてゆくのである。

前半のⅠ、Ⅱ章では、〈のうなし小僧〉や〈ねずみ浄土〉などの昔話の分析から、愚弄され軽蔑される怠け者や排除され軽視される老人が異人として定位される。それは、彼らが日常的秩序や社会原理を犯し混乱に陥れる存在であり、彼らのそのような行為がパラドキシカルに非日常的世界への回路を開き、呪力や根源的活性力を顕現せしめるからである。異人の犯しによって、見えざるマクロの世界と地上的なミクロの世界とが結合するダイナミズムが、昔話の構造の基層に措定されることになる。さらにⅢ、Ⅳ章では、昔話と古代の文献テクストの比較分析によって、マクロコスモスから放逐され、禁忌の違反によって絶えず正体暴露の危険にさらされながらミクロコス

モスとの関係において表出される異人を抽出する。より古層に属する根源的異人としての、見えざる世界からの〈まれびと〉たる来訪者、侵入者たちである。それは、ただ一度だけの聖なる、大いなる出来事を語る神話の仕掛けでもある。こうして前半に措定された異人は、根源的な異人が日常的共同体に入れ子として組みこまれたものであるという。ここに異人の位相の共時的重層性が解き明かされ、そのことによって通時的位相が明らかにされている。以上の論述は、柳田国男や折口信夫以来の論点を止揚して、新しくかつ魅力的である。

本書は副題に示す通り昔話を分析対象とはしているが、さらにその基層と古層を追究して、古代の神話や外国の昔話、神話にも及んでいる。昔話がその基層において始原の神話的世界に通底するであろうことについては、従来の昔話研究や神話研究も触れていることではある。そのようななかでも、テクストの深い分析に基づき、日本人の精神性や感性の問題をも顧慮しつつ構造的に解明する本書の価値は、卓越しているといえよう。

なお本書の方法の根底には、永年積み重ねられたフィールドワークの視座と、学位論文でもある伝承史的方法『ものがたり研究序説 伝承史的方法論』(桜楓社刊)の精緻な理論があることも付言しておきたい。

駒木 敏 (大学文学部助教)

河野仁昭著

### 『石川啄木 孤独の愛』

(洋々社・発行一九八六年四月  
B6版・二四三頁 一、八〇〇円)

たしか渡辺淳一が、こんなことを書いている。「好きな作家は？」ときかれて、「太宰治」と答えると、うんざりした顔をされて、「好きな歌人は？」という間に「石川啄木」と答えると、軽く笑われるがせきのやまだが、自分は、あえて「啄木」と答えない。

たしかに、啄木は学校の教科書にでているせいか、うっかり「啄木はいいなあ」と言っているとミーハーあつかいされる。私は啄木の全集を二組(岩波と筑摩)持っているが、いつも啄木については知らぬ顔をしてきた。

啄木関係の書物は、いま大きな新刊書店の棚には、二十冊はあるだろう。しかし、

その著者の中には、啄木の履歴には詳しいが、文学が分らない人もいて、困るのである。啄木ファンがミーハーあつかいされる理由も分らぬことでもない。その点、河野仁昭氏は、ずいぶん前から現代詩の世界ではたしかな場所に位置されている人である。

つまり文学が分る人だ。そのことは、本書の「啄木の詩意識——呼子と口笛」をめぐっての章で、「はてしなき議論の後」の一部が啄木によって削除され、一部が訂正された理由を論じてるところでも明らかである。河野氏は従来の「検閲への考慮」説ではなく、詩集としてのイメージの統一のためだろうとし、『時代閉塞の現状』や『新しき世界の姿』を具象的にえがく途は固く閉ざされていたから、詩集それ自体を斬新でハイカラなものにすることにによって、出版の意味を見出そうとしていた」という説を提出していて、私など大いに納得したのである。

啄木の歌の中に、橘智恵子をうたったものが二首ある。たとえば、「外套の襟に頤を埋め、夜ふけに立どまりて聞く。よく似た声かな。」はその一首だ。河野氏が新

島先生の手紙を見に行った札幌の家が、智恵子のおいの家だったという話など、不思議な感動をよぶ。啄木の友人で盛岡中学のストライキで論旨退学処分を受けた及川八楼は、同志社普通学校を経て、専門学校経済科を卒業し、アメリカに行き、帰国後の大正十二年十月、大阪毎日新聞事業部講師嘱託で死亡した。葬儀はクラーク館で行われた、という話も、河野氏がはじめて明かにした事実である。啄木や明治のキリスト教や同志社史に関心を持たれる人に、ぜひおすすめしたい本である。

山本 明 (大学文学部助教)

竹内成明著

### 『コミニケーション物語』

(人文書院・発行一九八六年六月  
B6版・二九九頁 一、九〇〇円)

本書は物語でもあり、歴史でもある。石器時代から現代にいたるまで、著者はコミュニケーションの起源と発達を辿りながら、人類の成立に思いをはせ、文明の歴史を物語る。同時に、スタンスをうんと大きく取った思想史にもなっている。ところどころに、寸評のように著者の文明批評||人

間批評が挿入されていて、それが意外に面白く、読者を引き付けて終わりまで離さない。

ルソアの『不平等論』にも似た前半の部分では、言葉の起源の問題が、集団労働説と挨拶行動説との絡まりの中で簡潔ながら要領よく展開されている。それは人間の、自分や他人についての意識・認識の成立の問題とも関連していて、著者の想像力と色彩感の豊かさが楽しい。「何時頃から、どうして人はおしゃべりになったか」といった問い自体、その発想の独自性を示しているのではない。洞窟の壁画について語る一方、神話の詰まった「籠」の意味も大切に取り扱う。文字の誕生と発達、書かれた言葉、書物、印刷等々になると従来の歴史とも重なるが、ここでも著者は最近の歴史研究の成果にも眼を配りながら、その思いは、遍歴職人や放浪学生の生活の方に傾く。その後は、急転、サロンや新聞、喫茶店ともなれば、もう現代に直結した諸問題が点描される。

いずれも刺激にとんだ数十冊にも及ぶ多数の選ばれた文献を、著者は自由自在に駆

使して、コミュニケーションの諸問題を手掛かりにしつつ、数百万年の人類の歩みを一気に語る。読者は、タイム・マシーンに乗せられて、猿人の過去からロボットの未来まで、人間の、自分の姿を、まざまざと見ることになる。隣人関係、社会関係、権力関係等を含むこの人間関係論は人類学、考古学から認識論や情報理論まで重層的でありながら、よく整理された議論を展開するので、極めて分かりやすい。専門にこだわらず、物事の見通しをつけようとすると人には誰でも参考になるであろう。

片山寿昭（文学文学部教授）

H・ユング他著

前川恭一監訳

『西ドイツの国家独占資本主義』

（大月書店・発行一九八六年五月）  
B5版・二七〇頁 二、四〇〇円

数年前、ヨーロッパで問われるままに経済（学）の研究を滞在の理由にあげたところ、日本人にはその必要はない、ヨーロッパ人が日本経済に学ばねばならない、とかえされた。同じように、われわれがヨーロッパから学ぶことはもはやないという日本

人であろうことも稀ではない。はたしてそうであろうか。

たしかに日本は有数の経済大国であり、その国際競争力はいまなお絶大である。国内では、行政改革、受益者負担、民間活力の利用ということがとびかい、社会保障の後退の局面をむかえている。本書を一読して、実はこのような局面がひとり日本だけでなく、EC諸国の雄たる西ドイツにもみられることを知ることができた。「今日の日本において、多かれ少なかれ共通する問題」がとりあげられていると、監訳者である前川恭一氏がいうゆえんである。

ちなみに、前川氏は本書のたんなる監訳者ではなく、本書の編集者でもある。本書は翻訳底本にあたる論文集が存在せず、西ドイツのマルクス主義調査研究所の機関誌の掲載論文から選択され、独自に『西ドイツの国家独占資本主義』として編纂されたものである。この点では、西ドイツの経済学者の自国認識を日本人の目で編纂、紹介したものであり、今日なおわれわれがヨーロッパから学ぶべきこととその学び方の姿勢をみせている。

本書の諸論文が訳者たちをひきつけるものはなにであろうか。憶測をするならば、その一つには、西ドイツの国家独占資本主義が、一九七二―七三年に、「国家独占的改良政策のコース」から「私的独占的発展のヴァリアント」へ転換をとげたという、この研究所がうちだしたテーゼがあげられよう。これによって、「国家による計画化や誘導にかわって、市場経済が促進されている。民営化・国有解体キャンペーンによって社会保障削減をめざす反動攻勢を容認する風潮が生みだされる」ということの深部にある変化にせまることができようであろうか。これはまた、世界的なスタグフレーションの顕在化とともに、ケインズ主義的な景気浮揚策からマネタリズムの貨幣・信用政策へ転換したとみることに通じるものであろうか。

もう一つをあげれば、国家独占資本主義の国際化といわれるなかで、「民族国家的な国家独占的規制が世界市場的諸条件の圧力のもとで、集中・独占化過程を推進すればするほど、ますますそれは、みずから国内経済的発展への影響にたいする作用の諸

可能性を掘りくずすことになる」という視点であろう。

大野節夫（大学経済学部教授）

R・F・ブライヤー著

光沢滋朗訳

『マーケティング制度論』

（同文館・発行一九八六年四月  
A5版・二六五頁 二、七〇〇円）

本書は Ralph F. Breyer, The Marketing Institution, 1984を本学光沢教授の手によって訳されたものである。

ブライヤー教授（一九七―七五）の著作は一九二五―四九年の間に発表され、本書はその中期の著作にあたる。マーケティング論の歴史からみれば本書が出された一九三〇年代はマクロマーケティングからマーケティング管理を中心とする「現代のマーケティング」へと移行する流れのなかでの転換期にあたり、本書についてもこのような背景をうかがうことができ

る。本書のマーケティング論発展のなかでの位置づけについては巻末の「訳者あとがき」に詳しく説明されているように、それ

までの羅列的、列挙的な記述からマーケティングを総体としてとらえ、その変化、発展と社会的役割をとりあげたという点で当時の伝統的考察の仕方を克服したものとして評価されている。このような著者の意図は Marketing Institution という書名に端的にあらわれている。光沢教授はこれを「マーケティング制度」と適切に訳されたのであるが、内容的にはマーケティング全体としての仕組みとしてとらえられ、そこには機構とその運動についての社会的位置づけという意味が含まれている。

ブライヤー教授は「市場は供給と需要の並置」であり、それ故に「市場とは売買の機会」と規定する。このように理解された市場とマーケティング活動の相互作用を対象とするところにマーケティング制度論の分析視点があるとする。そしてこのような観点からマーケティングの業務、機構、市場構造、社会的意義をとりあげている。

流通機構については多くの紙数を割き、交換の機会としての市場への対応を詳述している。このような視点と関心は全巻を通してみられ、そのため訳者光沢教授が指摘

されるように本書は「流通論あるいは流通機構論」という性格をもっている。

紙数の関係で詳述できないが、場としての市場、流通業者の役割と市場対応のほか、特に商才についての興味ある分析がべらられている。内容的には予備知識がないと理解しにくい点もあるが三〇年代の「画期的な古典」として大方のご一読を薦めたい。

木地節郎（大学商学部教授）

中條 毅編著

### 『日本の労使関係』

（中央経済社・発行一九八六年一月）  
A5版・一九九頁・二、四〇〇円

本書は、同志社大学文学部社会学科の産業関係学専攻創設二十周年を記念する事業として出版された。同学専攻の中条毅教授の編になるこの論文集は次のような四部構成になっている。まず、第一編は「労使関係総論」と題され、編者の一九八〇年代の労使関係の変動要因を手際よく分析した論文と、香川孝三教授の労使関係における裁判の役割を評価する論文の二つが含まれている。第二編は、現代の技能形成方式を国

際比較する際の、概念および方法論をたくみに展開した小池論文と、アメリカの日系企業の労務管理と労働組合の問題を、労働組合とのかわりでの対応姿勢を整理した重里論文からなる。

第三編は五つの論文を含み、一番長い。日本の賃金・人事制度の現実を「能力主義管理」という視点から切った石田論文、現在盛んに議論されている労働時間短縮問題を、労働基準法研究会の中間報告の批判という形でまとめた辻村論文、中小企業の雇用の条件を、賃金、労働時間、福利厚生的一面から解析した松村論文、障害者の雇用問題を、産業関係・労使関係の中でとらえた今城論文、「日本型労働福祉」の存在を肯定し、企業福祉の充実と社会保障の関係に注目した田中論文の五編である。

以上、多少紋切型にすべての論文でとり上げられている問題を紹介した。それぞれ、専門家にとって極めて有益なアイデアと情報に富んでいるだけでなく、初学者にも充分理解できるソリッドな内容をもっている。私が面白く、そして啓発されながら読んだのは第四編の座談会である。本書

の執筆者（辻村教授は病欠欠席、三塚教授は座談会のみに参加）が、それぞれ自分の論文の執筆動機やポイントに簡単にふれた後、参加者がその論文に対する疑問点や意見を出し合う、という形式ですすめられている。二十頁余りの短いものであるが、そこには、読者をひきつけるようなコメントや注意点が沢山盛り込まれている。ここでの忌憚のない討論は、それぞれの論文の問題点を浮き彫りにしてくれるだけでなく、問題の重要性、アプローチの是非、資料操作上の留意点などについて多くのことを読者に教えてくれる。この点でも、この第四編の座談会は、他の類似の論文集とは一味違った魅力を本書に与えている。同志社大学の産業関係学専攻の研究者たちのこのような学究上の雰囲気や、学部学生をふくめて、若い人々にも受けつがれていくことを期待する。

猪木武徳（大阪大学助教授）

廣川勝美編

『伝承の神話学』

(人文書院・発行一九八四年十月  
B6版・二〇七頁 一、五〇〇円)

本書の冒頭は次のように始まる。

人は、自らの存在の根拠を持っている。  
わたしは、そして、わたしたちは、本当  
にわたしであり、わたしたちであるのか。  
人はどこから来て、どこに帰るのか。

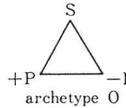
(序章 テクストのパスベクティヴ)

この根源的な問いにこたえようとするのが本書であり、とりわけ「日本のアイデンティティのルーツとしての、人と神の関係とその位相」を説明することを主題としている。注目すべきことは、その際に「キリスト教的な神と人の関係と原理」、すなわち「キリスト教の聖なるテクスト」たる聖書が対照軸として設定されている点である。それはなぜか。「通時的のみならず、より共時的な位相において、より根源的な、伝承の神話学を認めるためである」と、明確に示される通りである。ここに、書名『伝承の神話学』に込められた意図が知られるのであり、そして、そこでとり出さ

れてきたのが、アリストテレス以来の「ヘトポス」という概念とその捉え直しなのである。「ヘトポス」を分析概念にすることで、より共時的な理解による空間の配置が問題にされ、と同時にテクストの構造が明らかにされていくのである。この提起は現代の時間論的な議論の盛行に対する反指定ともなっている。

「ヘトポス」を「アイデンティティの変換可能性をはらんだ根源的な「場」として位置づけ、さらに「聖書の開示するトライアッドなヘトポス」のシステムをモデル化しただのが下図として示される。

このシステムは「正の極の否定としての負の極は、聖の極への可能性をはらんでいる」ということになる。それはいうまでもなく、我々が聖書を通して知るところの、「供犠」・「生—死—復活」・「奇蹟」・伝承などを成り立たしめる基層における原理である。トポロジカルな循環構造がそこに認められる。そしてこの序章に示される、文化の構造をより根源的に捉えるために提起された元型や母型を、具体的な「カミ・マレピト・遍歴



・遊行・神裔・日嗣・供犠」といった、さまざまなテクストの分析を通して検証していくのがI〜VIIまでの各章である。  
本書は、編者であり著者でもある廣川勝美教授を中心とした同志社の国文学専攻の卒業生らによるプロジェクトチームの成果ともなっている。幾度となき研究会での議論が本書を支えている。

キリスト教主義に基づく同志社の建学の精神が、その学問の内在的な方法との関わりにおいて切り結ばれ、実となったのが本書である。同志社に学び働く者として、本書が真に同志社の学問の証しとなって広く世に問うていく挑発の書となることを希っている。

小島繁一 (国際高等学校教諭)